

子宮内膜症

川口市立医療センター

産婦人科

ちしま ふみ ひさ
千島 史尚



子宮内膜症は、本来なら子宮の内側にある子宮内膜やその類似組織が、子宮外の骨盤内で発育し増殖する疾患です。主な症状は、月経痛や慢性的な骨盤痛、排便痛、不妊症などで、性成熟期にあたる20～40代に多くみられます。初経の低年齢化や晩婚化などで、女性の一生における月経回数が増えることが要因となり、子宮内膜症が増加してきていると言われています。発生する部位は、腹膜や卵巣のほか、現在では画像診断により、直腸やS状結腸、直腸腔中隔、膀胱子宮窩に瘤状の腫瘍ができることも分かるようになってきています。

治療法は薬物療法と手術療法があり、症状の強さ、発生部位、年齢、出産希望の有無などを総合的に判断し方針を決定します。痛みに対しては鎮痛剤や漢方薬を用いますが、効きにくい場合には、低用量エストロゲン・プロゲスチン配合薬(LEP製剤)などの内分泌療法を行います。卵巣に大きな嚢胞を形成し感染のリスクがある場合などは手術を行うこともあります。繰り返す手術を行うことは妊娠する力の低下につながると考えられています。薬物療法をしっかりと行っていくことで手術を回避できる場合もあります。

また、子宮内膜症などの器質的疾患を伴わない月経痛を機能性月経困難症と言い、15～25歳前後のかたに起こることがあります。最近の研究で、機能性月経困難症も時間がたつにつれ子宮内膜症を発症してくることが分かってきました。月経痛は、学業や仕事、対人関係にも悪影響を及ぼします。月経にまつわる痛みの症状があるかたは、我慢せず、産婦人科を受診し相談してみましよう。